

記憶というのは元来、彩度を持たない白黒なのだと思っている。

記憶の曖昧な幼少期、例えば何かをしてかして叱られた記憶があったとして、それは単なる事実でしかない。そこに、色はない。色を忘れてしまっている。けれど、つい最近、人前で話す機会があったとして、その時には緊張したし、どこかわくわくもしていた、やり切った時の達成感があった、とするならば。そこには感情という名の色がある。記憶は事実でしかないけれど、感情という色でもって彩られ、そうして初めて、想起されるに足るのだと、思っている。

色と一口に言ってみても、赤とか青とか黄とか、いろいろある。緑だ紫だ、と言い出してしまうと、それがどんな感情を表すのか、もうわからない。ふと思い出す記憶は、元々複雑な色で彩られているし、記憶を想起するたびに色を塗り替えたり、重ね塗ったり、混ぜてみたりとするものだから、時間がたつと、その記憶をどんな感情でもって思い出せばいいのか、振り返ればいいのか、分からなくなる。感情の色というのは芸術のようなもので、思い出す人の価値観や、思い出した時の状況によっても異なった印象を与えてくる。けれど、決まって「これは！」となるような、印象深い記憶もあったりする。それが何色の様相を呈していようと、思い出さすたびに「俺はここだ！」と叫んでくるような、深く刻まれた記憶が、あったりする。そういった記憶は「鮮烈」なのだと思う。

私は小学生のころから小説（当時のそれはパクリだらけの殴り書きだったけれど）を書いてきて、中学生時代に一度だけ、文学賞の授賞式で末席に座ってみたことがある。末席で、その場の最年少。そんな私が、見たこともないような豪華な部屋に足を踏み入れ、私みたいな世間知らずでも知っている会社の社長から名刺をもらったりした。そして、そういう人たちが並ぶ前で、小説に対する想いを語った。何というか、当時の私はふわふわしていた。初めての経験だったし、その場にいても、実感が湧かなかった。けれど、今振り返ってみればその日こそが、初めて「自分は小説を書いて生きていたい」と実感をもって、思えた日だった。それまでは単に、若さの象徴、だとかちょっとした趣味、だとか、そういう位置づけだった。それは私にとっても、そして周りにとっても、だったと思う。しかし、授賞式の末席にあずかり、私の考えというか意識は変わった。あまりに鮮烈すぎる記憶だったから、記憶が手を伸ばせる領分を飛び越え、私の意識という領域にまでその変革を届かせた。鮮烈な色を持つ記憶は、自分の領分なんてものに囚われない。そして、感情の色のような、良くも悪くも変化する彩りではなく、鮮烈さは、決して変化せず普遍的な、美しさを持っている。

さて、小説を書くというのは鮮烈な記憶を書き出していくことなのだと、私は思う。もちろん、これは執筆の工程の一つなのだろうけれど。そして、鮮烈な記憶があればあるほど、物語は書きやすいし、それこそ鮮烈な小説を書けるのではないかと思う。そういう風に考えるとき、私には鮮烈な記憶が足りないのではないか、という焦燥感に見舞われることがあった。人の目を引くような、極端な経験をしたことがなくて、私の鮮烈な色では、万人の感情を動かすには足りない。そういう、驕った劣等感に囚われることがしばしばあった。しかし、そういう時にこそ思うのだけれど、鮮烈な記憶は、そうあるものとして世界にあるのだろうか。国語の授業で小説を書いたとして、私はそれを鮮烈な記憶として覚えるのだろうかけれど、ほかの人にとってのそれは他愛ない記憶、色さえ持たない白黒の事実にも、なりうるのではないか。それならば、鮮烈な人生を歩む必要はないのだから、すべての日常を鮮烈だと受け止められる、そんな感性を、持っていたい。